ヴァンパイア
アカデミー
1
VAMPIRE ACADEMY
リシェル・ミード
中村有以＝訳
ソフトバンク文庫

ヴァンパイア アカデミー1

2009年12月28日　初版発行

著者　リシェル・ミード

訳者　中村有以（なかむら ゆい）

翻訳協力　株式会社トランネット

発行者　新田光敏

発行所　ソフトバンク クリエイティブ株式会社
〒107-0052　東京都港区赤坂4-13-13
電話03-5549-1201（営業部）

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

デザイン　株式会社ケイズ

フォーマット・デザイン　モリサキデザイン

カヴァーイラスト　山本のり

本文組版　アーティザンカンパニー株式会社

落丁本、乱丁本は小社営業部にてお取り替えいたします。
定価は、カバーに記載されております。
本書に関するご質問は、小社エンタテインメント書籍編集部まで書面にてお願いいたします。

© TranNet KK 2009 Printed in Japan　ISBN 978-4-7973-5678-6

江苏工业学院图书馆
藏书章

リシェル・ミード

ヴァンパイア アカデミー1

ソフトバンク文庫

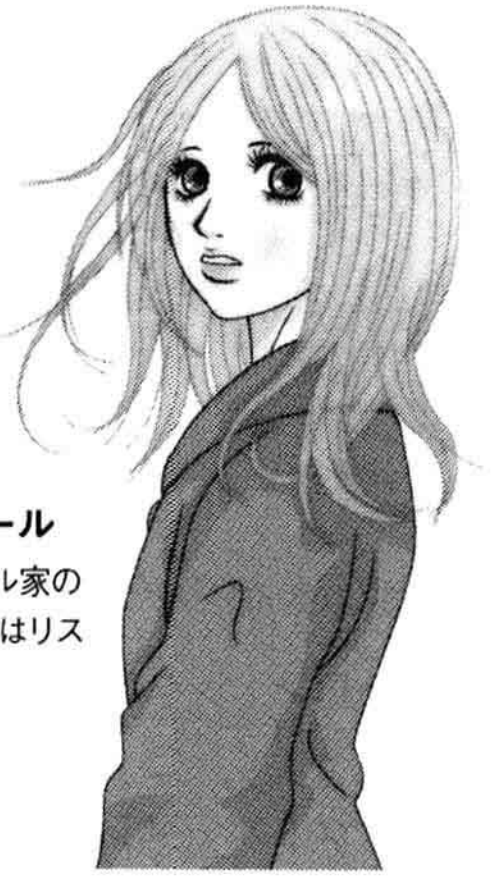
VAMPIRE ACADEMY
(Vampire Academy, Book1)

by Richelle Mead

Copyright (C) 2007 by Richelle Mead
Japanese translation published by arrangement with
Richelle Mead c/o Dystel & Goderich Literary
Management through The English Agency (Japan) Ltd.

主要登場人物

ローズマリー・ハサウェイ
ダンピール。ガーディアン見習いの
少女。通称ローズ



ワシリサ・ドラゴミール
モロイ。王族ドラゴミール家の
後継者。通称リサ、またはリス

ディミトリ・ベリコフ
経験豊かなガーディアン。
ローズを指導する

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

クリスチャン・オゼラ
モロイ。周囲から完全に無視されている。リサに興味を持つ

ミア・リナルディ
モロイ。ローズとリサを強く憎悪している

そのほかの人物

アーロン……モロイ。リサの元交際相手。現在はミアと交際している

ヴィクトル・ダシュコフ……リサのおじ。難病に苦しんでいる

ナタリー・ダシュコフ……ヴィクトルの娘。リサのルームメイト

メイソン・アシュフォード……ダンピール。ローズの友人。ガーディアン見習い

ジェシー・ゼクロス
ラルフ・サルコジ
……モロイの男子生徒

ソーニャ・カルプ……学園の教師。不思議な魔法を使う

エレン・キロワ……聖ウラジーミル学園の校長

1

強い恐怖が伝わってきた次の瞬間、リサの叫び声が聞こえた。

リサの悪夢があたしの中にドクドクと流れ込み、あたしは、自分の夢から引きずり出された。ビーチでセクシーな男の子に日焼けオイルを塗られている夢を見ていたのに！

頭の中で、イメージが――あたしのじゃなく、リサのイメージが――暴れる。炎。血。煙の匂い。ねじれた車の金属。たくさんのイメージに包囲されて息が詰まりそうになったとき、頭の中に残っていた正気の部分が思い出させてくれた。これはあたしの夢じゃない。

あたしは目を覚ました。額に、長い黒髪が数本張りついている。

リサは隣のベッドで、悲鳴を上げながらもがいていた。あたしは慌ててベッドを飛び出すと、数十センチほど離れたリサのベッドに駆け寄った。

「リス」リサの体を揺すって、声をかける。「リス、起きて」
少しずつ悲鳴が小さくなり、やがて、すすり泣きに変わった。「アンドレ」リサがつぶやく。「なんてことなの」
リサが体を起こすのを手伝いながら、あたしは言った。「リス、ここはもうあの場所じゃないよ。起きて」
リサのまぶたが震えて、開いた。薄暗がりの中で、瞳に正気の光がともる。激しい呼吸が静まると、リサは頭をあたしの肩にあずけて、もたれかかってきた。あたしは片手をリサの背中に回し、もう片方の手でその髪をなでた。
「大丈夫」優しく言う。「何も心配ないからね」
「あの夢を見たの」
「うん。分かってる」
少しの間、あたしたちはそのまま黙っていた。数分後、リサが落ち着いてきたのを感じてから、あたしは二台のベッドの間に置かれたサイドテーブルに手を伸ばし、ランプをつけた。あまり明るくならなかったけれど、リサもあたしも、それほど明るくなくたって、見るのに困ることはない。ハウスメイトが飼っている猫のオスカーが、明かりにつられて寄って来て、開けっぱなしの窓の下枠に飛び乗った。
オスカーは、あたしと距離をとりながら――ダンピールは、なぜだか動物に嫌われる

のだ――ベッドに飛び乗った。ごろごろと喉を鳴らしながら、リサに頭をこすりつけている。モロイと動物は相性がいい。中でもリサは、どんな動物にも愛される。リサは、笑顔でオスカーのあごをくすぐり始めた。あたしは、リサが落ち着きを取り戻していくのを感じた。

「最後に〝フィーディング〟をしたのはいつだっけ？」リサの顔を観察しながら訊く。ただでさえ白い彼女の肌は、不健康に青白かった。目の下には半月形のくまができているし、ひどく弱々しく見える。そういえば、今週はずっと学校が忙しかった。前回リサに血をあげたのは、いつのことだろう。「たぶん……二日以上前だよね？　どうして何も言わなかったの？」

リサは目をそらしたままで、肩をすくめた。「あなた、忙しかったでしょう、だからわたしは――」

「黙って」あたしは、フィーディングをしやすい位置に移動しながら言った。弱々しく見えるのも、当然だ。オスカーはあたしを避けて、安全に事態を見守ることのできる窓辺に戻った。「ほら。どうぞ」

「ローズ――」

「いいから。これで具合がよくなるよ」

あたしは頭を傾けて、髪を後ろに振り払い、首をむき出しにした。リサがためらって

いるのが分かる。でも、むき出しの首と、そこを流れるものの魅力にはあらがえなかったようだ。飢えた表情が彼女の顔を横切り、唇がわずかに開く。すると、人間たちと生活している間は隠している牙があらわになった。リサの顔には不似合いな一対の牙。淡い金髪とかわいらしい顔立ちは、ヴァンパイアというよりも天使のようだもの。

リサの歯が首もとに近づくと、あたしの胸は恐怖と期待で高鳴った。期待――毎回これを感じてしまうのは嫌だったけれど、どうしようもない。振り払うことのできない、あたしの弱さの証だ。

リサの牙があたしの肌にきつく食い込む。一瞬激痛が走り、あたしは声を上げた。しかし、痛みはすぐに薄れ、全身に輝くような最高の歓喜が広がった。酒を飲んだときよりも、ハイになったときよりも、いい気持ち。セックスよりもイイ――と思う。したことがないから、想像では、だけど。混じりけのない純粋な歓びがあたしを包み込み、この世に間違ったことなどひとつもないと囁く。快感はさらに続いた。リサの唾液に含まれる化学物質の影響で大量の脳内モルヒネが分泌され、あたしは、ここがどこなのか、自分が誰なのかも忘れるほどの幸福感に包まれた。

そして、名残惜しいけれど、それは終わった。一分足らずの出来事だった。

リサはあたしから離れると、こちらをうかがいながら手で口をぬぐった。「平気？」

「ああ……うん」あたしはベッドに倒れ込んだ。血を失ったせいで、くらくらする。

「少し眠ればなおる。平気だよ」

翡翠(ひすい)のような明るい緑色の瞳が、心配そうにあたしを見つめている。リサは立ち上がって言った。「何か食べるものを持って来るわね」

断ろうとしたけれど、うまく言葉にならない。リサは、あたしが何か言うより先に部屋から出て行った。フィーディングの最中に感じていた陶酔感は、リサが牙を抜いた瞬間に薄れていたけれど、その余韻はまだ血管の中にとどまっているようだ。口もとがだらしなくゆるむ。あたしは頭を動かして、窓辺に座ったままのオスカーに目をやり、声をかけた。

「どれだけイイか、あんたには分からないでしょうね」

けれどオスカーは、窓の外の何かに気をとられていた。身構えて、漆黒の毛皮を逆立てている。しっぽもピクピクと動き出した。

あたしはにやけ顔を引っ込めて、必死で体を起こした。目の前の世界がぐるぐると回る。それがおさまるのを待って、何とか立ち上がると、再び激しい目まいに襲われた。しかも今度は、なかなかおさまらない。マシになったときを見計らって、よろめきながら窓辺に向かい、オスカーと並んで外の様子をうかがう。オスカーは警戒したようにこちらをチラッと見て、あたしから少し離れると、気になる何かの方に視線を戻した。

なまぬるい風が――ポートランドの秋とは思えないほどの暖かさだ――窓から身を乗

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

り出したあたしの髪をもてあそぶ。外は暗く、かなり静かだ。時刻は午前三時。大学のキャンパスがある程度落ち着く、唯一の時間帯。リサとあたしが八カ月間生活してきたこの部屋は、統一感のない古い建物が建ち並ぶ、キャンパス内の居住区域にある。道の向こうでは、切れるまぎわの街灯がチラチラと点滅していた。それだけの明るさがあれば、周囲の建物や車の様子を充分に確認できる。あたしは、庭に目をやった。さまざまな高さの木々のシルエットが見える。

その中で、一人の男がこちらを見つめていた。

あたしは、驚いて飛び退いた。窓から一〇メートルほどの位置にある一本の木の側、つまり、この部屋の中の様子をはっきりとうかがえる場所に、誰かいる。ここから何か投げれば当たるんじゃないかと思うほどの近さだ。ついさっきまでリサとあたしがしていたことも、見られていたかもしれない。

男は影の中にとけ込んでいたので、あたしの目でも、さすがに容貌（ようぼう）までは分からなかった。はっきりと確認できたのは、長身、それもかなりの長身だということだけ。男は、あたしがその存在に気づいた次の瞬間、庭の向こう側の木々が作り出す暗闇の中に消えていった。その直後には、彼のすぐ近くに潜んでいたと思われる別の誰かが、同じ暗闇の中にのみ込まれていった。

その正体が誰であるにしろ、彼らがオスカーに好かれていないことは確かだ。あたし

以外は、たいてい誰にでもなつく猫なのに……それが、自分に直接危害を及ぼす相手でない限り。窓の外の男たちは、オスカーに危害を加えようとしたわけではないが、この猫は、彼らから、不安になるような何かを感じ取ったらしい。

あたしに対して感じているのと同じような何かを。

ひんやりとした恐怖が体を貫き、リサに噛まれたときの幸福感がほとんど――すべてではなかったけれど――消え去った。あたしは窓から離れると、転びそうになりながら、床に脱ぎ捨ててあったジーンズに足を通した。それから、自分とリサ、二人分のコートと財布をひっつかみ、最初に目に入った靴をひっかけて、部屋から飛び出した。

階段を下りると、狭いキッチンで、リサが冷蔵庫の中を引っかき回していた。テーブルでは、悲しげな表情をしたハウスメイトのジェレミーが、片手を額に当てて、微分積分の教科書を見つめている。リサはあたしに気づくと、驚いた顔をした。

「起きちゃだめよ」

「ここを出よう、今すぐ」

リサは目を丸くした。けれど、次の瞬間にはすべてを理解したようだった。「ローズ……本当に？　確かなの？」

あたしはうなずいた。なぜ確かなのか説明はできないけれど、確信があった。

ジェレミーは、興味津々といった様子でこちらを見ている。「どうしたんだい？」

あたしは、あるアイデアを思いついた。「リス、ジェレミーから車の鍵をとって」

ジェレミーは、リサとあたしを見比べて言った。「二人とも、いったい――」

リサは、ぐっとジェレミーに近づいた。あたしとリサの心を結ぶ特別な〝絆（きずな）〟から、リサの不安が伝わってくる。でも、伝わってきたのは不安だけじゃない。あたしに対する全面的な信頼、「ローズがどうにかしてくれるはず」、「二人とも無事に切り抜けられるはず」という強い思いも伝わってきていた。いつものことだけれど、あたしは、どうかその信頼に報いることができるようにと願った。

リサは満面の笑みを浮かべて、ジェレミーの瞳をまっすぐに見つめた。ジェレミーは、困惑した様子で見つめ返す。数秒後、あたしには彼がリサの〝とりこ〟になったことが分かった。ジェレミーは、うつろな目で、うっとりとリサを見つめている。

「あなたの車を貸してもらいたいの」リサは優しく言った。「鍵はどこかしら」

ジェレミーは笑顔を浮かべた。あたしは、背筋に寒いものを感じた。ジェレミーと違って、あたしには、リサの〝強制〟への耐性がある。それでも、リサがこの力を使っているときには、その恐るべき効力の一端を感じずにはいられない。幼い頃からずっと、使ってはいけないと教えられてきた〝強制〟の力……。ジェレミーはポケットから、大きな赤いキーホルダーにぶらさがった鍵の束を取り出した。

「ありがとう」リサが言う。「車はどこに止めてあるの？」

「通りのまっすぐ先」ジェレミーは夢でも見ているような目つきのまま答えた。「ブラウン通りの角のところ」つまり、四ブロック先だ。

「ありがとう」リサはゆっくりと言った。「わたしたちが出て行ったら、すぐにお勉強に戻ってほしいの。今晩わたしたちに会ったことは、忘れてちょうだいね」

ジェレミーは素直にうなずいた。今の彼なら、リサに頼まれれば崖からだって飛び降りるだろう。人間という生き物はみんな〝強制〟に弱いものだけど、ジェレミーは特に弱いようだ。ありがたい！

「行こう」あたしはリサに言った。「とにかく移動しないと」

あたしたちは外に出て、ジェレミーの言っていた場所を目指した。けれど、しつこい目まいのせいで足もとがふらつき、思うように急ぐことができない。転びそうになるたびにリサに支えられながら、やっとの思いで前へと進む。あたしの胸には、リサの不安が押し寄せていたけれど、あたしはそれを必死で無視した。まずは、あたし自身の恐怖をどうにかしなければ。

「ローズ……もしも捕まってしまったら、どうすればいい？」リサが囁く。

「捕まりっこないって」あたしは強い口調で返した。「そんなこと、あたしがさせない」

「だけど、もう見つかってしまっているのなら――」

「前にも見つかったことはあるけど、捕まらなかった。車で駅まで行って、ロスに向か

おう。そうすれば、あいつらも追って来られないよ」

あたしは、それが単純なことであるかのように言った……そう、いつものように。本当は、ちっとも単純なんかじゃない。何しろ、小さな頃から一緒に暮らしてきた人たちから逃げているんだから。リサとあたしは、二年間、逃亡生活を続けてきた。あちこちに隠れながら、高校卒業を目指していたのだ。今はちょうど、最終学年の一学期が始まったところ。大学のキャンパスなら、安全だと思ったのに。自由まで、あと少しだったのに。

リサはそれ以上何も言わなかったけれど、あたしには、彼女のあたしに対する信頼がより強固なものになったことが分かった。これが、あたしたちの関係。行動を起こし、事態を展開させるのがあたし。ときには無謀なことをするのも、あたしの役目。一方リサは、あたしよりも理性的。行動に移す前に徹底的に考えて、綿密な調査をするタイプだ。どちらのスタイルも、それぞれ役立つときがある。今必要なのは、無謀さだ。ためらっている暇はない。

リサとあたしは、幼稚園の頃からの親友だ。文字の練習の時間、ペアを組まされたときからの親友。あの日、先生は、あたしにはリサの名前、リサにはあたしの名前を書かせようとした。だけど、五歳の子どもに「ワシリサ・ドラゴミール」だとか「ローズマリー・ハサウェイ」だとか書かせるなんて、あまりにも酷だと思わない？　だからあた

したちは――というか、あたしは、抗議の行動に出た。先生に教科書を投げつけて、「このファシストのろくでなし野郎！」と叫んだわけ。もちろん当時のあたしにはこの言葉の意味なんてちっとも分かっていなかったけれど、とりあえず教科書は、狙いどおりに飛んで行った。

あの日から、リサとあたしは、切っても切れない仲なのだ。

「聞こえる？」突然リサが言った。

リサの鋭い聴覚が捕らえた音があたしにも聞こえたのは、数秒後のことだった。それは、足音だった。素早い足音。あたしは顔をゆがめた。車まで、まだあと二ブロックもあるのに。

「走らなきゃ」あたしはリサの腕をとって言った。

「だけど、あなたには無理――」

「走って」

ありったけの意志の力を使わないと、気を失って歩道に倒れてしまいそうだった。血液を失い、しかもリサの唾液の影響が残っている体は、走るのを嫌がっている。あたしは自分の筋肉に、文句を言わずにリサについて行くよう命令した。あたしたちの足音が、コンクリートの地面に響く。いつもなら、難なくリサより速く走れるのだけれど――しかも、リサは裸足だし――今夜は、リサの助けがないと立っていることすらできない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com